

令和6年度年報の発刊に寄せて

令和6年度の岡山医療センターの年報がまとまりましたので、お届けいたします。

本年は、Okayama Medical Center Good Clinical Study Award(西崎賞)を小児科の樋口洋介先生が受賞され、総説を寄稿されています。また、糖尿病・内分泌内科の片山晶博先生が2型糖尿病に対する最新の治療戦略と題して総説を寄せられていますので、ご閲読頂ければ幸いです。

当院は、高度急性期・急性期医療を診療の軸として、臨床研究、教育・人材育成にも注力しております。地域医療支援病院、総合周産期母子医療センター、地域がん診療連携拠点病院、地域災害拠点病院、更に、原子力災害拠点病院、がんゲノム医療連携病院の指定も受けており、また国立病院機構としての政策医療(がん、心筋梗塞、脳卒中、糖尿病、救急医療、災害時医療、周産期医療、小児医療)、移植医療(腎移植、骨髄移植)、運動器医療、難病医療など、総合的で高度な急性期医療を提供してきました。また、岡山市からの委託を受けて岡山市立金川病院を地域包括ケア病院として運営しています。コロナ禍が終息しても病院を取り巻く環境は益々厳しくなっていますが、地域医療への貢献を第一として、地域の中核病院としての役割を果たして参ります。

研究面では、臨床研究部を有し、成育医療推進研究室、先進医療研究室、低侵襲医療研究室、分子病態研究室、臨床研究推進室、がん医療研究室を配置して、数多くの共同研究、治験を実施し、毎年多数の英文論文発表、国際学会発表も行っており、令和6年度の臨床研究活動実績の評価では、全国に140ある国立病院機構病院内で11位でしたが、特に、英文論文の投稿が急速に増えており、情報発信力が増してきています。

教育・人材育成の面では、岡山医療連携推進協議会(CMA-Okayama: Council for Medical Alliance)に参加して、診療面での協力体制はもとより、医学生の実習にも力を注いでおります。また、大規模治験の推進並びに良質な医師の育成の協同作業を通して、岡山大学と連携し岡山県の医療水準のレベルアップに貢献しているところです。さらに、附属看護助産学校を併設し、良質な看護師、助産師の育成に努めるとともに、研修会等へ積極的に参加させ、技量の習熟に努めさせております。他方、日本有数の規模を誇るスキルアップラボ、

ホスピタルスタジオを有しており、複数の全国研修会を主催して、国立病院機構の職員だけでなく、地域の医療従事者のレベルアップにも貢献しています。更には、外国からの医師の見学受け入れ、あるいは交換留学などを通じて、国際医療に貢献できる体制を整えています。

なお、本年報は ISSN を取得しており、本年度に記載された研修医先生方の論文は国立図書館へ収蔵され、医学中央雑誌へ抄録が掲載されています。令和6年度1年間の当院の歩みをじっくりとご覧いただければ幸いです。

「今、あなたに、信頼される病院」の理念の下、「地域に求められ、地域を支える」病院を目指して、今後も今まで以上に、職員一同邁進していく所存です。引き続き、ご指導ご支援をよろしくお願いいたします。

独立行政法人国立病院機構 岡山医療センター
院長 柴山 卓夫